

2013年10月29日

学長 尾池和夫

## 2013年度 前期卒業式 祝辞

京都造形芸術大学を卒業する15名の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。今日、皆さんは、先生方に、ご家族の方々に、あるいは友人に祝福されて卒業式を迎えています。参列していただいている、瓜生山学園の役員、副学長、学部長、教職員とともに、みなさんの門出を心からお祝いたします。

これから社会に出て働く方々、あるいは進学して研究者の道を目指す方たち、さまざまな進路がみなさんの前にあることでしょう。いずれにしても、4年以上の年月を過ごしたこの京都造形芸術大学が、明日からあなたがたの母校になります。今日、大学を出るとき、もう一度、人間館を出たところにある「藝術立国之碑」を読んでみてください。少しだけ時間をさいて、学んだ大学を振り返って見て下さい。そのときの感慨をしっかりと記憶に残してほしいと思います。

卒業した後、社会では厳しい試練が待っているでしょう。そのとき、ここで学習したことを思い出してください。それを活かして新しい展開につないでください。どうしても解決しない難関に出会ったら、遠慮なく母校に来てください。私たちは同窓会の仕組みを整備し、この京都造形芸術大学のキャンパスを維持し、改善して待っています。

今日の卒業式にあたり、私から皆さんに申し上げたいことがあります。その1つは、今、瓜生館の1階に展示してある資料のことです。そこには、皆さんの在学中、昨年に創設された文明哲学研究所の田中勝先生たちによる『「平和の新世紀」プロジェクト2013 in ロスアラモス』の報告があります。

ロスアラモスは、アメリカ合衆国が国家防衛のために設置した最大の軍の施設があり、核兵器の維持管理などが行われているところです。ロスアラモス歴史博物館には、マン

ハッタン計画の歴史があります。また、広島平和記念資料館にある原爆投下時のパノラマ写真と同じ写真が展示してありますが、その展示の上には、「THE PACIFIC WAR ENDS」と書いてあります。ロスアラモスは、科学と軍との出会いの場所でもあります。この出会いは20世紀最大の矛盾ではないかと、瓜生館の1階では問いかけているのです。

次に、中国北京での体験を話したいと思います。

1つは、北京の空のことです。先週、10月21日に北京に到着するとき、空がスモッグで満たされているのに改めて驚きました。次の日は、日本でも北京の環境が最悪の状態であると報道されるほど、ひどい空でした。徳山詳直理事長と一緒に、北京の中南海で劉延東副総理に会いましたが、その往復の車の中で、中国はこれからどうなるだろうか、世界はこれからどうなるかと、2人で改めて藝術立国の重要性を確認する会話をしました。この大学を卒業する皆さんの力が、この北京の青空をとりもどす力になってほしいと思いました。

2つ目は、天津商業大学でのことです。天津商業大学の劉書瀚学長が、徳山詳直理事長の『藝術立国』の本を、中国語に翻訳して出版するという事業を実行してくれて、その出版記念祝賀会が大学で開催されたのです。徳山理事長が自らの信念を話され、天津商業大学の教授や多くの学生たちがそれを聞いてくれました。私も「藝術立国之碑」の3行を中国語に翻訳した発音を、本学の国際交流を担当する金海月さんに教えてもらい、中国語で紹介しました。この本学の建学の理念は、天津商業大学の皆さんにも大きな感銘を与えたと劉学長たちから聞きました。

芸術の力で、世界の平和を実現するという『藝術立国』の思想は、国境を越えて伝える必要のある思想であり、今日、卒業される皆さんにも、それをさまざまの形で伝える人になっていただきたいと願っています。

北京のホテルでは、夜、昔私の指導で博士学位を得た2人の研究者が訪ねてきてくれました。その人たちは、中国地質科学院で、世界で一番深い観測用のボアホールを、江蘇省の東海県で掘削する仕事に従事している人たちであり、5189mの深さに達したボーリング坑の現状を紹介してくれました。今日卒業される皆さんにも、このようにして世界のどこかで、またお目にかかりたいと思います。そのときには、ぜひご自分の仕

事の話をお聞かせ下さるようお願いして、今日の私のお祝いの言葉の結びといたします。  
ご卒業、まことにめでたうございます。

尾池和夫